

推薦入試制度の検討

景山甚郷 太田武夫 山田一朗

要 約

岡山大学医療技術短期大学部看護学科では、平成5年度より定員の約20%を募集人員とした推薦入試制度を導入し、以来本年度で3回卒業生を送りだしてきた。本学は来年度から保健学科として新入生を募集することになっており、推薦入学もとられる予定である。そこで、これを機会に推薦入学学生と一般入試による入学生との在学成績、学習態度等を比較検討し、推薦入試制度の有用性を検討した。

推薦入学生との在学成績は一般入試による入学者の成績とほとんど差はないか、むしろよい傾向にある結果を得た。今回の検討結果は在学成績のみでしかも期間が3回しか卒業生を送りだしていない時点であることから推薦入学制度の有用性を結論づけるためには更に今後検討が必要である。

キーワード：推薦入試、成績、有用性

はじめに

近年18歳人口の減少しつつある一方、大学進学率が上昇しており、大学生の資質の幅が大きくなっている。また、我が国の大学教育水準の遅れも問題視されており大学教育の在り方が各大学で検討されている。

大学教育の在り方を考える過程で、選抜方法も各大学の教育目標に沿って工夫されている。本学においても、看護学科において平成5年度より推薦入試制度を導入し、1996年に最初の卒業生を送りだし、以来、本年度で3回卒業生を送りだした。

本学は来年度（平成11年度）から保健学科として新入生を受け入れることになり、これまでの推薦入学学生と一般入学学生（看護学科）との受験者数の推移、受験者の出身県及び在学成績、学習態度などを比較検討し、それに若干の考察を加え報告する。

推薦入学者の選抜実施方法

定員の約20%すなわち16名程度を募集人員とし

た。

1993年および翌年は選抜基準として面接、調査書、小論文に基礎能力として英語の試験を行った。1995年度からは推薦入試本来の目的についての検討を重ねた結果¹⁾から、英語の筆記試験を廃止している。

教育課程

本学の授業科目は、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目および専門教育科目である。一般教育科目は人文科学として哲学、文学、心理学、社会心理学の5科目があり、社会科学には法学、経済学、社会学、教育学がある。さらに、自然科学の数学I、物理学、化学I、生物学I、情報科学概論、統計学を含めて、合計15科目が一般教育科目として開講されている。一般教育科目では自然科学の情報科学概論のみが看護学科の必修科目でその他は全て選択科目である。外国語科目においては英語I、英語II、ドイツ語が開講され、英語Iが必修科目である。

研究 方法

1. 対象

平成5年度から7年度までに看護学科に推薦で入学した学生及び一般入試で入学した学生を対象とした。

2. 分析方法

推薦入学者と一般入試による入学者の在学成績の統計学的処理にはt検定を用いた。

結 果

1. 推薦入試受験者数

過去6年間の受験者数は110名, 146名, 154名, 114名, 106名, 60名であり, 倍率にすると9.6~3.8倍であった。

2. 受験者の出身県

平成5年から平成7年の本学を受験した学生の出身県を多い順にみるといずれの年も, 岡山県, 広島県, 兵庫県が上位3県であった。

3. 一般教育科目の履修状況

平成5年度から8年度入学生的一般教育科目の履修状況を見ると, 人文科学の哲学, 文学, 心理学の3科目には年度により推薦入学者(推薦)と一般入試による入学者(一般)間に大きな差はなく, しかも入学者の80~100%の学生が履修していた。ところが, 倫理学は推薦と一般との間で年度による履修割合に大きな差はないものの入学者の履修割合としては年度により大きく異なり, 平成5年度入学生の場合は最も少なく入学者数の10%であり, 平成7年度のそれは60%と最も多かった。社会心理学の履修割合は毎年平均しておりいずれの年も推薦, 一般ともに50%前後であった。

社会科学科目をみてみると, 経済学, 社会学, 教育学ともに推薦と一般を問わず入学学生の70~100%が履修していた。法学の場合は平成5年度入学生のみが30%の履修割合であるが, 他の年度入学生はいずれも80%以上が履修していた。

自然科学科目では人文および社会科学科目の場合と違って科目により大きな差が認められた。すなわち, 物理学の授業は毎年, 推薦, 一般の区別なく入学者のわずか3~5%の学生が履修していた。一般教育科目の中でも最も履修者の少ない科

目であった。次いで自然科学科目の中で少ない科目は数学Iで平成5年度入学生の場合の入学者の65%を除いて以後20%前後の履修割合が続いていた。三番目に少ない科目が化学Iの約40%であった。数学I, 化学Iともに推薦と一般で履修者の割合に大きな差は認めなかった。残る生物学Iおよび統計学は推薦, 一般ともに90%以上の学生が毎年履修していた。

4. 推薦入学者と一般入試による入学者の在学成績

推薦入試選抜基準に英語の筆記試験が行われた平成5年度とそれを廃止した平成7年度に入学した学生の在学成績を一般のそれと比較検討した。検討科目は推薦入学者が全員履修した科目に限定した。一般教育科目の人文, 社会, 自然科学の中からそれぞれ心理学, 社会学, 情報科学概論科目が対象となり, 専門科目の中からは基礎看護学として基礎看護技術を臨床看護学として成人看護実習(内科)を対象として選んだ。また, 専門科目の平均点も推薦と一般で比較検討した。

平成5年度入学生の成績を図1に, 平成7年度入学生の場合を図2に示した。平成5年度の場合は心理学で推薦入学者の方が一般入学者と比べて5%以下の危険率で有意に平均点が高得点であった。その他の科目は情報科学概論を除く3科目で推薦入学者の平均点が一般と比べて高い得点を示したが, いずれも有意ではなかった。

平成7年度入学生の結果も平成5年度とほぼ同様の傾向を示し, 情報科学概論の推薦の平均点が67.8と一般の68.2と比べてわずかに低い得点を示す以外, 残りすべての科目で平均点は高かった。しかし心理学に有意の差は認められなかった。

専門科目の平均点を入学年度別に比較した場合, 図3に示すように推薦が両年度とも高く, しかも平成5年度の場合は5%以下の危険率で有意に平均点が高かった。

5. 推薦入学生の学科内成績順位

平成5年度から7年度の推薦入学生の一般科目, 専門科目, 総合での学科内成績順位を図4に示した。

同一人で専門科目順位が一般科目順位より同じ

推薦入試制度の検討

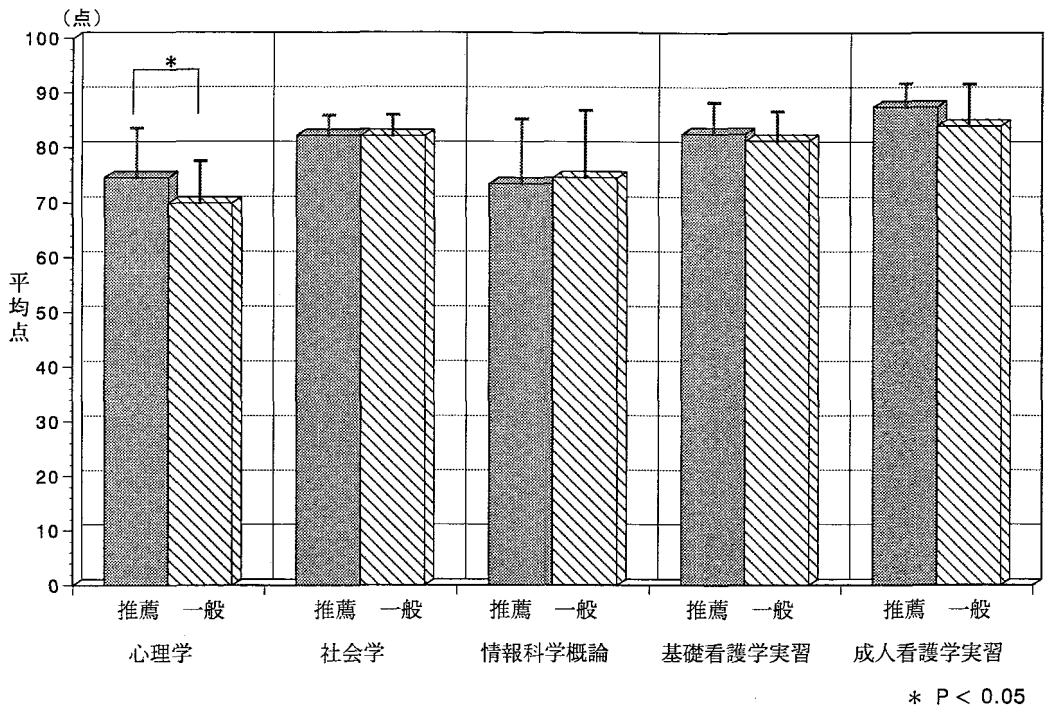


図1 平成5年度看護学科入学生の科目成績

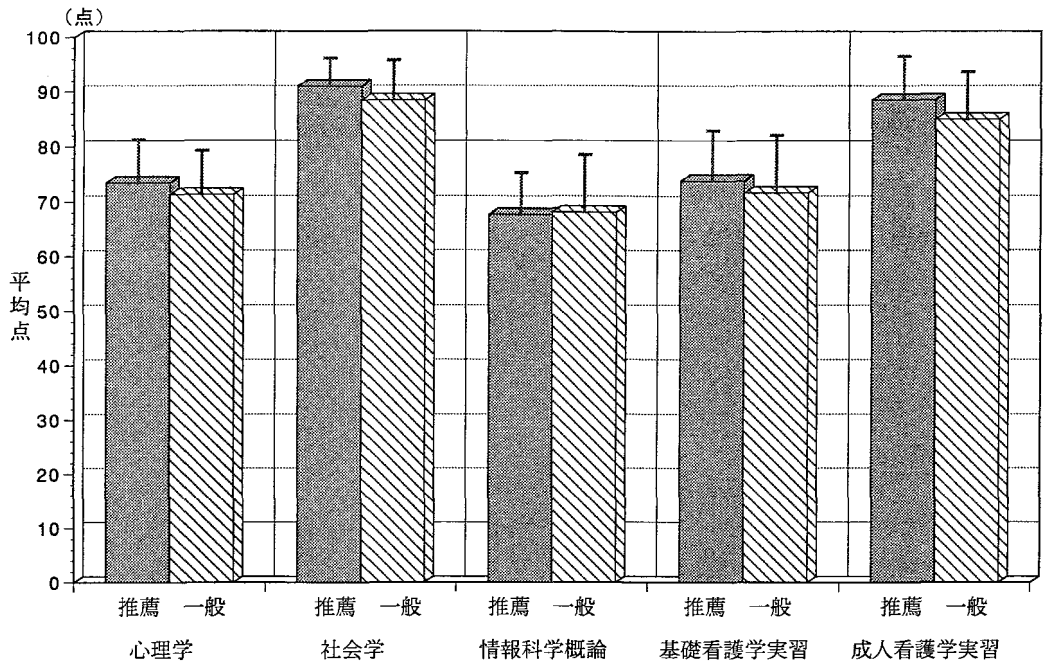


図2 平成7年度看護学科入学生の科目成績

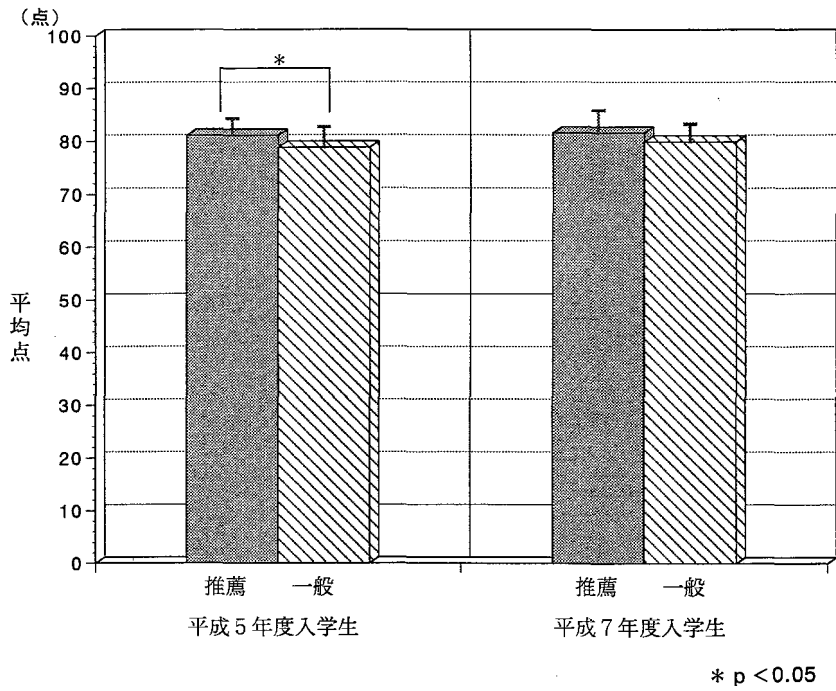


図3 専門科目の平均点

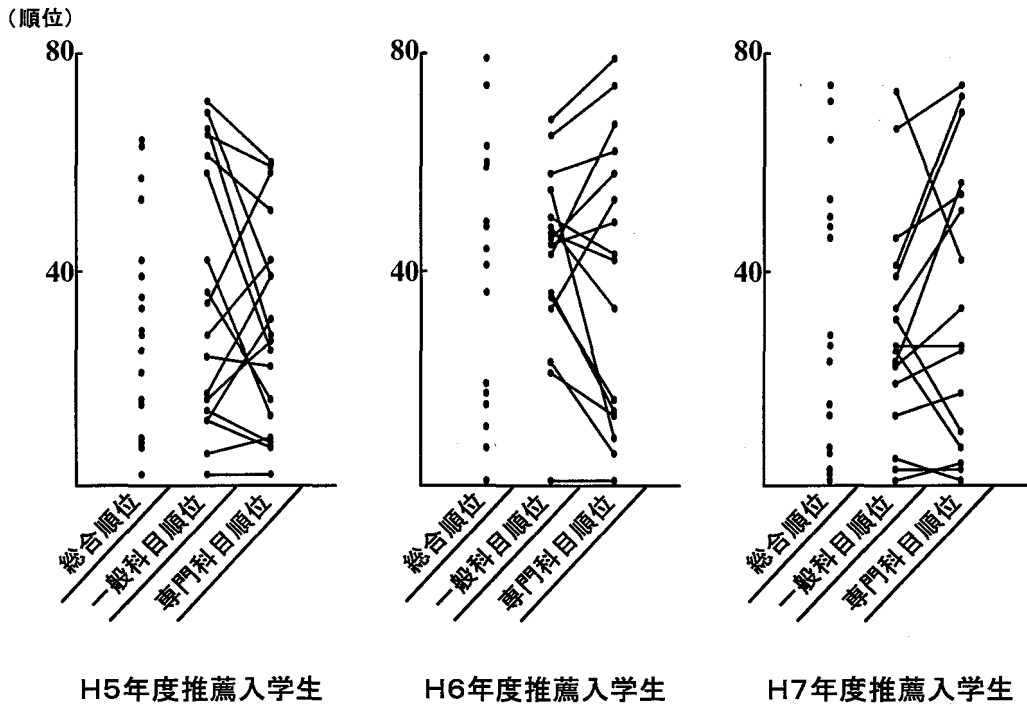


図4 看護学科推薦入学生の一般、専門、総合の学科内順位

かよくなった人数を調べてみると、平成5年度入学生では18名中12名、6年度では16名中9名、7年度で16名中7名であった。

卒業時の成績順位を3年間みても、上位40位以内で卒業した推薦入学者は13名、8名、9名であった。推薦入学者の中で卒業時のトップ成績者は、それぞれの年度の2番、1番、2番で卒業していた。

考 察

岡山大学医療技術短期大学部看護学科では平成5年度に推薦入試制度を導入以来、6年目の平成10年度に最後の推薦入学生を迎えた。

6年間の受験者数は、平成7年度の154名をピークに翌年は114名そしてその後、106名、60名と減少し、平成10年度の数は初年度の約半数であった。本学科を受験した学生の出身県の上位3県の受験者合計は総受験者の64～70%を占めていた。近年本県はもとより近県にも次々と看護系の4年制大学が設立されてきており、18歳人口の減少の影響もうけて、本学の受験者数が減少してきたものと推定される。

一般入試の受験者数も推薦入試と同期間で見ると、同様の受験者数の推移を示しており、平成7年度がピークで以後漸減していた。

看護学科入学生の一般教育科目の履修状況を見ると、推薦入学者および一般入試による入学者との間には科目による受講割合に差は認めなかった。しかし、両群の学生はともに物理学と数学Ⅰの履修者数は毎年少なく、看護学生は理科系科目が不得意と思わせる結果である。今回の検討課題をやや離れるが、数学や物理学は論理的思考法の修得や自然科学の考え方を学ぶうえで大切な科目である。看護に生かすうえでこのことの重要性を今後学生に指導し、少しでも多くの学生が受講するようにすべきと思われる。

一般教育科目分野の人文、社会、自然からそれぞれ1科目づつの計3科目、専門科目分野からは基礎と臨床を1科目づつの計2科目を選択して、

平成5年度および7年度入学の両群の学生の成績を比較した。平成5年度で推薦が心理学で一般より有意に平均点が高い結果を得たが、その他の科目および7年度の場合は2群間で成績に差は認められなかった。また、専門科目も2授業科目で比較した場合、平成5年度および7年度入学生は2群間で差は認められなかった。しかし、専門科目の平均点、すなわち専門授業科目総得点を平均し比較すると、平成5年度は推薦が有意に点数が高かった。これらの結果は、推薦は一般の成績とほとんど差はないか、むしろよい傾向にあることを示している。推薦を定員の40%（32名）選抜している、我々と同じ国立大学短期大学部の報告²⁾によれば5年間にわたる全ての科目別成績の平均点は、推薦と一般に差はほとんどなかったとしている。

また、本学推薦の成績順位をみると、専門科目順位が一般科目順位より良くなる学生が多い傾向にあることと総合順位で上位40番以内に半数以上認められることもそのことを支持している。しかし、この度の検討結果は、在学成績のみでしかも期間が3回しか卒業生を送りだしていない時点であることや結果に表していないが、これまでに推薦に1人の退学者と3人の留年者を出していること、更に推薦の入学時順位が在学成績順位と必ずしも平行しないことなどを考え合わせると推薦入学制度の有用性を結論するには早計であるように思われる。今後、推薦の卒業後の動向や退学・留年が出たことの詳細な分析そして、これから卒業していく3回の在学成績など多方面からの検討も合わせて考察する必要があると思われる。

文 献

- 1) 自己点検・評価報告書
平成6年10月以降の改善と新たな課題、岡山大学医療技術短期大学部、平成8年3月
- 2) 入学者選抜方法並びに募集人員に関する検討（平成7年度短期大学入学者選抜方法研究委員会経費報告書）、平成8年3月

(Original)

Evaluation of the system of admitting students on the recommendation of their high school principals

Jingo KAGEYAMA, Takeo OHTA and Ichiro YAMADA

Abstract

At the nursing department of our college, we introduced in 1993 a system of admitting students on the recommendation of their high school principals, by which about 20 % of the full quota are to be admitted. Since then, our department has graduated students for 3 years. To evaluate the usefulness of this system, students admitted by this system were compared with those admitted by general entrance examination in terms of their college record and the during learning. The college record in the students admitted on recommendation was similar to or slightly better than that in the students admitted by general entrance examination. However, these results were obtained only by comparing the college record, and this system has been used only 3 years. To confirm the usefulness of this recommendation-admission system, further studies are necessary.

Key words : recommendation-admission system, record, usefulness

Faculty of Health Sciences, Okayama University Medical School